

工学部
建築学科
小林 茂雄教授
工学博士



小林 茂雄(こばやし しげお)

- 1991年 東京工業大学工学部建築学科卒業
- 1993年 東京工業大学大学院社会開発工学専攻修士課程修了
- 1993年 東京工業大学大学院助手
- 1998年 博士(工学)(東京工業大学)
- 2000年 武蔵工業大学(現・東京都市大学)工学部建築学科 講師
- 2004年 ネヴァダ州立大学ラスヴェガス校客員研究員(～2005)
- 2011年 東京都市大学工学部建築学科 教授

●研究テーマ

- ・人と人とのコミュニケーションに与える光環境の影響
- ・周辺環境の特徴を活かした街路照明計画
- ・落書き、グラフィティと都市問題

●受賞歴

- 日本建築学会賞(論文) 2010年 照明学会照明デザイン賞奨励賞 2008年
- 北米照明学会(IESNA)国際照明デザイン賞2008年
- 大岡山建築賞(卒業設計優秀賞) 1991年

●主な所属学会

- 日本建築学会、照明学会、人間環境学会



小林先生を囲んで。みんなで考えたローラのポーズで「オッケ〜」。

街を面白くする材料は、街の中にある

先進的な研究で「優秀研究者賞」受賞

工業製品として規格に添って作られたはずの建物や街も、年月の経過とともにだんだん違う顔を見せ始め、独特の個性ある街になっていきます。それは建物や街の中に、「人間の営み」があるから。小林研究室では、人がそこに暮らすことによって醸し出される、街や建物それぞれの個性をよく見つめることから、新たな環境・空間デザインを生み出していく研究が行われています。

今回は研究室の皆さんにもご参加いただいて、日頃の研究やフィールドワーク、街を楽しくする試みを熱く語ってもらう、大変賑やかな取材となりました。

住宅地の明かりに、家族の食事風景を想像したことは、誰でも一度はあるはず。街や家の明かりには、住む人の生活様式を連想させる力があるようです。また街の落書きも、そのほとんどは意味のないものであったり、犯罪を助長するような迷惑行為ですが、街に対して「描かずにはいられない」若者の衝動は、時として見る人に驚きを与え、思いがけず意外な空間を生み出すことがあります。

街や建物それ自体は設計図通りに作られた、いわば「工業製品」の集まりにすぎません。しかしそこに人が住めば、人は何かに駆り立てられ、街もまた個性や活気、特徴、意外性など

を内包していきます。こうした街の持つエネルギーは、効率的計算やデザイナーの創作では得られない、新たな可能性を見せてくれます。

「街の面白さとは、予定調和的でなく、意外性の中にこそ生まれると思うんです。ですから“意図して作られた何かを持ち込む”のではなく、“すでに街の中にある潜在的な特徴をまず見つけ出し、それを表面に引き出す”ことで、街の個性や面白さを追求することにしました」と小林先生が語るように、この研究室は、街や建物と、人の生活・環境要因の関係を考えるのが研究テーマ。街や人を観察し、住人と一緒にフィールドワークの中から得

られた発見を素材として、環境・空間デザインに役立てようとしています。

小林先生は、こうした研究の先進性が評価され、平成22年度の日本建築学会賞(論文)、また東京都市大学の平成23年度優秀研究者賞を受賞されています。

光の研究を通じて、震災復興や地域活性化に貢献

小林研究室では、これまではストリートウォッチングや落書きの研究なども多く行ってきましたが、現在は“光と街・人の関係”に関する研究が中心です。昼間の街の景色は、自然や建物、インフラが作る景観ですから、大



きく変えるのは大変。一方、夜の街路や空間は、光を使えばかなり大きく変わります。この費用対効果を考えると、簡単に、そして大きく街の景観を変える手段として、街路やイルミネーションは非常に魅力的なんだそうです。現在は「街路班」「アート班(イルミネーション)」「暗闇班」の3班に分かれての研究が行われています。

街路班ではこの1年間、東日本大震災の被災地において、神社の階段を使った避難誘導光、仮設商店街の照明光の実験を行いながら、光による復興・街づくりの取り組みを行ってきました。想像以上に真っ暗な震災後の被災地は、小さな光が大変な安心感につながります。それが復興の原動力として、人と人をつなげるツールとなることも分かってきました。



被災地・釜石市の避難誘導を可視化するあかり(左)と、横浜の住宅展示場を照らすクリスマスイルミネーション(右)



イルミネーションを使った効果や影響などを研究するアート班は、大学近くの尾山台の盆踊りや秋祭りの中で、子供たちや商店街の皆さんと「光のワークショップ」を行っています。子供のふとした発想は意外な発見につながることも多いそうですが、それ以外にも、これまで交流のなかった商店街が、大学生との交流を歓迎してくれており、“街の皆さんと景観を考える”取



ウィングラスを利用した照明演出の準備をする、研究室の皆さん(左)今年4月にNHKと共同で行った「明治初期の街の灯りの再現」。こんな楽しい研究も行われている(右)

り組み自体が、地域社会に創造的な活気を生み出すという効果も表れてきています。

最後の「暗闇班」は一風変わった名前ですが、暗闇という“感覚を遮断した空間”で、人がどのような行動を行うか、実験を通して調べています。“暗くなると眠くなる”という経験のある人は多いと思いますが、それ以外にも“感覚の制限された空間では、初対面でも連帯感を深めやすい”などの傾向が、この研究から明らかになってきました。このように環境要因から影響を受け、人が無意識にそうしてしまうケースはまだ多いはず。あまり知られていない“人と環境の関係”を調査し、空間デザインに役立てることも、この研究室の重要なミッションです。

研究の最先端を走るには、学生が高め合う環境が必要

小林研究室では大きな特徴として、グループを作り、大学院生を中心に学生が主導の立場で研究を進めています。先生自身「自分の研究という感じがしません(笑)」というくらい、問題意識を持ち、テーマを決めて進めるのはすべて学生だとか。しかしこの指導方法には、小林先生の持論が強く反映されています。最先端のテーマを扱う研究は、“学生の能力が”その分野でトップを走れるくらいに高まっていなければできません。しかし教員が設定したテーマで研究指導する方式では、その高みに達することは難しかったそうです。「一人の例外もなく全員が議論に参加して自分たちで目標を設定し、それに向かって力を合わせて取り組む時、人は集団としても、個人としても一番能力が高まります。ですからそれぞれのグループが自立し、またグループ間で切磋琢磨して高め合う環境を作ることは、どうしても不可欠なんです」と、小林先生は語ります。

研究室の皆さんにも話を聞いたところ、「チームワークも高まるし、自分の価値観だけにとどまらない思考が発展できる」「責任感とプレッシャーが大きく、それだけにやりがいがある」など、効果を実感する声が聞かれました。

こうしたメンバー間交流にとどまらず、調査を通じて常に人と交流する小林研究室。研究を面白くする要因は「常識や一般的な考えの逆を突く」ことと考える小林先生は、この交流こそが、既存の価値観を超えた感性を身につける最良の教材と考えています。